

どこからが滑稽俳句ですか 山頭火の場合（二）

有富洋二

山頭火翁、あなたは、私の高校の先輩ですね。しかも主席で卒業されたそうなの。山頭火イコール自由律俳句と、ふつうにイメージされますが、そもそもは本名の正一に対して「田螺公」の俳号で、熱心に定型俳句を作っていましたね。早稲田大学を中退して実家に戻った後の酒造場時代の明治四十三、四年の二十八、九歳の頃は、地元の文芸誌に、ツルゲーネフやモーパッサンの翻訳を發表したり、地元の句会で、句友と盛んに交流していました。さらには郵税無料の個人誌「郷土」を發行しています。一方で二十九歳のとき、自由律の俳誌「層雲」が創刊されます。その二年後より初出句、後に選者として関わり、やがて山頭火の句風が始まりますね。

はだかで話がはづみます

あるけばかっこういそげばかっこう

ひとりで蚊にくはれてゐる

自由律俳句は、定型や季語の制約から解放され、「我」の感動を物に託し、存分に詩的に表現するものです。芭蕉以来の伝統、そして子規の近代俳句の改革の大きな本流の水を浴び、そして今日、自分たちで掘り進めた川を流れています。

去来の『去来抄』にもある芭蕉俳句にとっての滑稽の位置づけ、『俳諧大要』にある子規の言及によれば、俳句における滑稽の重要性については、今さら論を俟たないですね。そこで、自由律俳句において滑稽は在りうる、と半ば強引にここまで考えて来ましたが、ならば山頭火俳句にある滑稽は、どのようなものでしょうか。

星があつて男と女

まいにちはだかでてふちよやとんぼや

からだぼりぼり搔いて旅人

芭蕉のことばに、「名人はあやふきところに遊ぶ」がありますね。私のとても好きなフレーズで、チャレンジせよ、チャレンジし尽くせよ。と解釈しています。山頭火においてはまさに、脱線と挑戦のくり返し。くどくなりますが、山頭火をことばで表せば「自虐・頹廢・自分本位・土俗的・揶揄・鋭敏・謙虚・極端・奇行・後悔・激情・孤独・気負い・業の深さ・諦め・懺悔・劇的・破滅・無茶・役立たず・我執・我が儘・義理堅く誠実（酒以外は）・頑強・善人ぶり・コーヒーが映画が水が山が好き・面白いがしまつにわるい… e t c」となります。

ことほどさように「玉にきず」ならぬ「きずに玉」のごとき個性から生み出す俳句に、滑稽が潜り込んでいます。

初孫がうまれるそうな風鈴の鳴る

けふはおわかれの糸瓜がぶらり

ゆつくり歩かう萩がこぼれる

初期の俳諧由来の固有の属性とされる知識と理屈による滑稽、「掛詞」や「地口」などといった言葉遊びや知的な機知は見当たりません。山頭火独特の生きにくさを抱えながらの、常軌を超えたライフスタイルが生み出す俳句から、滑稽も紡ぎ出されます。

酔っ払いの、風狂人生を送りながら、詠み続け、自分を公開してゆきます。